

自蹊庵便り

平成二十七年霜月

NO 116

―五事とは―

過日この夏のもっとも暑かった頃、ちよつと一休みしていた折、仕事がらみの書棚コーナーからではなく、以前からじっくり読み直してみたい本コーナーから一冊だけ持ち出して読みふけておりました。

若かりし頃びっしり赤線を引いて熱き心根で読んだにも関わらず、きれいさっぱり忘れていることに落胆ひとしきりにございませぬ。が、しかし今ここに時間を費やすことの幸せを喜ぶべきかと…。

私が興味深いいつも感心してやまないのは、中国において紀元前二千年〜一千年ほどの間に、すでに文字があり書き残されていること、その文字から想像する人々の営み、考え方などです。

一字一句が新鮮でいつの時代も不滅であることを確信できるほどの格調の高さです。その中の一文に九条の大法というのが出てまいります。正確には紀元前一四〇〇年頃、殷王盤庚いんおうばんこうの時代に記されたものですが、九条のうち特に一と二に三重丸をつけてあ

ります。

一は、五行について書かれたものですが、五行にしても木火土金水を相生と相剋ぐらゐの把握しかなかく、深い理解もないままに至っておりますが、一は水、二は火、三は木、四は金、五は土であり、水はものをうるおして低いところへ流れるもの。火は燃えて上にのぼるもの、木は曲げたりまっすぐにしたりにして、加工できるもの、金は人の意のままに形の変わるもの、土は種を蒔き収穫することのできるもの…と、読みす

すんでみると、陰陽五行の成り立ちも解りやすく、更にものをうるおして低いところへ流れる水は塩辛く、燃えて上に昇つていく火はこげくさく苦く、曲がったりまっすぐなったりする木はその実が酸っぱく、人の意のままに形の変わる金はひりひりと辛く、土から生まれる百穀は甘いのです。…とあります。

さて、次なる二、五事とはの内容ですが、私達が日々より良く生き、生活していくための基本が最も簡潔な言葉で表されており、

きつとそこに感銘を受け三重丸をつけたように記憶しております。そのまま抜粋いたしますと、五事とは

一は姿ふるまい、二は言葉、三は視、四は聴、五は思慮であります。

姿ふるまいは謹厳でなければならず、視は明らかでなければならず、聴は聴くなら

ば、思慮は緻密でなければなりません。

謹厳なふるまいをすれば心は敬虔になり、人の従うような正しい言葉をはげばうまく治まり、視が明らかであればものを見とおすことができ、聴が聴ければ計画は当を得たものになり、思慮が緻密であればあらゆるものの本質をつかむことができるのであります。―とあります。

西洋の古代ギリシヤの空想の神々の世界とは違い、人々の生活に根差した中国古代の思想にじっくりとくるのは、やはり多大な影響を受け続けて今日の日本があるからなのでしょう。私達が世に住む事実のものとして、今に新しく心打たるる屈指の名

著であると思います。

五事の一から五までを毎日復唱して、遅ればせ乍ら七十二歳からの命、スタートをきることにいたしましたでしょうか。誠に誠に遅ればせ乍らではありませんが…。

一の姿ふるまいについての蘊蓄だけでも、一冊本が書けそうにございますが、まずは姿勢をととのえ、背筋を力まずに伸ばし、ふるまいというものも脈打つ鼓動と同じリズムを持ち、深い深呼吸一つするも茶禅一味の座禅に通じ、ふるまいの一つ一つ背中からにじみ出るもの、足の運び、手の仕草、指先の末端に至るまで心に留めおくことなど、ここまで書きますとお解りのように、まさに茶道の呼吸と同じではないでしょうか。

行動に間合と気配けはいと呼吸、茶道具の置きがったのように自ずと立ち位置を醸し出す、そのような姿振る舞いに憧れます。(ほど遠くはございますが…)

二は言葉、これまたしかり、昨今はテレビなど見ておきますと、辞書になき言葉の連発ですものね。それは論外にあらずの現状にございますが、声のトーン一つでも顔の表現は変わります。齢を重ねゆくことに太くなるは生理現象もございますが、優し

い声はお人の心に素直に伝わるものにございましょう。

百も承知ながら常々は結構強く物言いをする自分をもてあましております。まったなしの茶事料理を仕事とするも一人では間に合わず、お人の助けを借りるも、この茶事という難解な世界にプロを目指したい人もおらず、右往左往するばかりの三十年余にございました。

いくたびぞ声をあらげる

わが身寂しき

こんな歌を作ったことも思い出します。

誠に言葉というものを覚悟をもって大切にしていかなければ…と、人生の仕上げのプログラム、大きな大きな課題にございませぬ。

謹厳なふるまいをすれば心は敬虔になり、人の従うような正しい言葉をはげばうまく治まり々云々。謹厳とは、つつしみ深く行いの正しいことを云いますが、奥深い言葉にございます。一人の従うような正しい言葉をはげばうまく治まるは道理、言葉は心の鏡なり、視が明らかであれば、ものを見とおすことができーにつきましたは、少し違った見解を持っております。私が常感じる見るといことは、目で見る事が出来

るがゆえに近視眼的に陥りやすく、心の目の働きが二の次になりやすいのでは…と感ずることがままあります。三十代の頃やはり過労から失明しかかったことがありますが、ああ、また違ったものが見えるかもしれない…と心によぎったものです。ちよつと横道にそれましたが、明らかな視めを持つということも、なかなか訓練が必要かと…。

確かな視めを持ち、素直にあるがままを受け入れる、私は今迄そういう方に三人ほど出逢ってきております。生涯の内に六人そのような人に出会うように出来ているとも聞いた事がありますが、人生の達人に三人もお逢いできただけでも十二分な身に余る宝物にございます。

なれど、残生ままならず先達の方々の許にも近づけず、八方足りないままでの途上の一齣みづを生きるのみにございます。

四の聴みみがさとければ計画は当を得たものなりしーも、日常人の咄をよく聴くということの大切さも、身につまされるほど実感しております。仕事柄咄す側に廻ることも多く、いかに聴く側に廻るか、耳を傾ける心と時間をゆったりと持ち合わせているか、反省多き日々でございます。

五の思慮が緻密であればあらゆるもの

本質をつかむことができる―云々は、一から四までを心すれば自ずと思慮深くして緻密に至るものと思いすれど、一つ一つが間々ならぬ身にあつては、なかなかの道程にございます。時足りぬ残生ではありませんが、今日一日にて足る中に答えはすべてある気配もいたしますれば、何はともあれ、よく視みよく聴き、よく働き、欠点を嘆かず、心を惜しまず、今日一日の命を真つ当したく存じます。

さあ！秋、宴たけなわにございます。お一人お一人の口は何をお届けしましょうか。まずはお濃茶一服のための虫養い、茶事はこの上なく面白く、限りなく無限を秘め、生涯にまばたきするほどの人生の一齣をそこ（茶事）に費やす仕合わせを感じいつております。

―今日という一日ひとひを生きて願うこと

多くはあらず健やかなれば―

鶴女

編集子注

五事は書経に記載があります。

茶事教室の御案内

霜月の茶事（口切り）実壺にて

十一月八日（第二日曜）

十一月九日（第二月曜）

実壺にて

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

会費 一万二千元

師走の茶事（夜咄）

十二月十三日（第二日曜）

十二月十四日（第二月曜）

席入 四時

点前担当・水屋実習者

午前十一時

会費 一万二千元（ことぼし料含）

特別教室の御案内

庭の関守石のひも結び教室

拙庵のささやかな庭でも、茶事となれば通路を指定し、お客様の通路を示すが必要となります。

それに使うのが関守石ですが、石にシュロ縄をかけるのも大変です。

今回特に、北山造園で修行された佐倉市在住の朝倉彩芳先生を講師に招き、関守石の作り方の実習をいたします。

併せて、棕櫚箒の作り方も学びます。奮ってご参加ください。準備は一切ありません。

期 日 十月二十五日（日）

時 間 午前十時

会 費 三千五百円

（昼食の点心を含む）

留石の御注文も賜ります。

御希望の方はファクスで拙庵まで

0475-54-2518